

収録・解説 酒井董美

語り手 矢間省三さん

(大正8年生まれ)

昭和63年8月20日収録

あらすじ

昔、百姓が天女の衣を見つけて隠す。天女は天へ帰れなくなり百姓と結婚し、2人の子どもを設けた。ある日、子どもが父親から「言つな」と言われていたのに、母親について「お母さんの着物だ」と隠しておいた櫃を開けて見せた。

母親は、天に昇るためその羽衣を着て、朝顔の蔓に伝わり天に上がってしまった。子どもたち2人は嘆き悲み、呼び返そうと、山に登って鼓や太鼓を打ったり笛を吹いたりしたので、打吹山という名前がついた。

## 打吹山の天女

(倉吉市越中町)



イラスト・福本隆男

## 打吹山の地名由来譚

解説

のときには木組みがしてありました。

夕顔か朝顔かはつきりもないが、賀茂神社に井戸があり、夕顔の井戸か朝顔の井戸か名前があれ、わたしの子ども

打吹山の地名由来譚で

夕顔か朝顔かはつきりもないが、賀茂神社に井戸があり、夕顔の井戸か朝顔の井戸か名前があれ、わたしの子ども

夕顔か朝顔かはつきりもないが、賀茂神社に井戸があり、夕顔の井戸か朝顔の井戸か名前があれ、わたしの子ども

夕顔か朝顔かはつきりもないが、賀茂神社に井戸があり、夕顔の井戸か朝顔の井戸か名前があれ、わたしの子ども

夕顔か朝顔かはつきりもないが、賀茂神社に井戸があり、夕顔の井戸か朝顔の井戸か名前があれ、わたしの子ども

夕顔か朝顔かはつきりもないが、賀茂神社に井戸があり、夕顔の井戸か朝顔の井戸か名前があれ、わたしの子ども

ある。別な話(倉吉市関岡町の伝説をはじめ、滋賀、という地名由来譚に金町大鳥居、光村吉司さん談(明治39年生まれ)で天女の産んだ子の名がお倉とお吉で、倉吉の地名になったとしている。

日本三大羽衣伝説といえ、室町時代、世阿弥元清作とする謡曲の「三保の松原」で知られる静

岡町の伝説をはじめ、滋賀、という地名由来譚に賀長浜市、京都府京丹波市の三つの天女伝説を呼称しているが、故野津龍・鳥取大学名誉教授類婚姻譚に分類されるは、早くからこれに鳥取「天人女房」が、特定の

加えて、日本四大伝説とすべきたと主張している。わたしも氏の説にまったく同感である。

さて、矢間さんとは別較検討し、古事記神話の話では、舞い降りた天女が湯梨浜町の東郷池で水浴びをしている隙に、羽衣を狛師の舎人に盗ま

れ、天に帰れなくなった。彼女はその妻となり、お倉とお吉という2人の娘をもつける。成長した娘から羽衣のありかを聞き出した彼女は、羽衣を着て天に飛び去る。娘たちは母を慕って山の上まで

後を追う、鼓を打ち、笛を吹いて母を呼び返そうとしたが無駄であった。その山が打吹山。娘たちの住み着いたところが倉

野津龍氏は先の三大伝説との伯耆の伝説を比較検討し、古事記神話の話では、舞い降りた天女が湯梨浜町の東郷池で水浴びをしている隙に、羽衣を狛師の舎人に盗ま

れ、天に帰れなくなった。彼女はその妻となり、お倉とお吉という2人の娘をもつける。成長した娘から羽衣のありかを聞き出した彼女は、羽衣を着て天に飛び去る。娘たちは母を慕って山の上まで

後を追う、鼓を打ち、笛を吹いて母を呼び返そうとしたが無駄であった。その山が打吹山。娘たちの住み着いたところが倉

野津龍氏は先の三大伝説との伯耆の伝説を比較検討し、古事記神話の話では、舞い降りた天女が湯梨浜町の東郷池で水浴びをしている隙に、羽衣を狛師の舎人に盗ま

れ、天に帰れなくなった。彼女はその妻となり、お倉とお吉という2人の娘をもつける。成長した娘から羽衣のありかを聞き出した彼女は、羽衣を着て天に飛び去る。娘たちは母を慕って山の上まで

後を追う、鼓を打ち、笛を吹いて母を呼び返そうとしたが無駄であった。その山が打吹山。娘たちの住み着いたところが倉

野津龍氏は先の三大伝説との伯耆の伝説を比較検討し、古事記神話の話では、舞い降りた天女が湯梨浜町の東郷池で水浴びをしている隙に、羽衣を狛師の舎人に盗ま

れ、天に帰れなくなった。彼女はその妻となり、お倉とお吉という2人の娘をもつける。成長した娘から羽衣のありかを聞き出した彼女は、羽衣を着て天に飛び去る。娘たちは母を慕って山の上まで

後を追う、鼓を打ち、笛を吹いて母を呼び返そうとしたが無駄であった。その山が打吹山。娘たちの住み着いたところが倉

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声がかかります。